

越境する Buddhist Social Work の浸透の過程

—社会的表象理論の視点からの一考察—

○ 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 東田 全央 (009910)

藤森 雄介 (淑徳大学・002911)、松尾 加奈 (淑徳大学・002671)

キーワード：社会的現実、インディジナス・ソーシャルワーク、国際ソーシャルワーク

1. 研究目的

ソーシャルワークをめぐる多様な議論が国境を越えて活発化してきている。その近年の一例として、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 (ARIISW) がアジア圏の関係者等とともに実施してきた仏教ソーシャルワークに関する国際共同研究の活動と成果、対話がある。私立大学戦略的研究基盤形成支援事業を受け、「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する総合的研究」(平成27年度～令和元年度、アジア仏教社会福祉学術交流センター)を実施した。アジア諸国の研究者や実践家とともに、仏教ソーシャルワークの諸相を探求し、本学会第67回秋季大会においても報告した (Gohori 他, 2019)。2023年4月現在、モンゴル、ベトナム、ラオス、タイ、スリランカ、中国および台湾、カンボジア、ミャンマー、ネパール、ブータン等において各国の関係者らがその歴史、実践、教育等を探索的に記述してきた。それらの知見をもとに研究シリーズ『仏教ソーシャルワークの探求』(学文社)として発刊するとともに、国際フォーラムやセミナーも開催してきた。

国際ソーシャルワークの観点からみれば、それらは国境を越えて、新たな説明枠組み、あるいは主流言説に代わるもう一つの視点としての広がりを見せている、と捉えることができる。そして、多くの人びとによって、様々な実践や活動、教育等の諸相が仏教ソーシャルワークとして語られ、社会的現実として築かれてきた、と考える。本研究では、それらの研究活動を踏まえ、仏教ソーシャルワークの国際社会への浸透の過程について探索的に明らかにすることを目的とする。本報告では日本国内における「仏教福祉」等との関連はあえて議論しないことを意図し、以後は **Buddhist social work (BSW)** と記述する。

2. 研究の視点および方法

本研究では、社会的表象理論 (SRT) の視点から考察を行う。SRT は、言語化されていないような新奇あるいは未知の「事象・出来事が、係留と物象化の2つのメカニズムを通して『馴致 (familiarize)』され、安定した社会的現実として、人々の日常世界に定着するまでの社会的構成の過程を記述、分析する理論」(矢守, 2001:1-2)である。研究手法として、おもに英文の文献データ (n = 21) 等を収集し、SRT の観点から、記述的および解釈的に分析を行った。「命名」と「分類」からなる「係留」と、「画像化」と「自存化」から構成される「物象化」という SRT の枠組みを援用して分析した。

3. 倫理的配慮

本報告は文献研究に基づいており、ヒトを直接的な調査対象としておらず、研究倫理審査は受けていないが、本学会研究倫理規程に基づき配慮を行ったうえで研究を実施した。本発表内容について共同研究者の承諾を得た。

4. 研究結果

既存の社会的表象の体系への意味づけ・位置づけである「係留」の過程には次のような事象がみられた。BSW 研究者の主張によると、2,500 年以上も前から、一部（Engaged Buddhism 等）を除き、必ずしも BSW と名付けられない実践が行われてきた。ARIISW が企画立案した国際共同研究等、とくに 2015 年にアジア諸国における共同調査（通称「5 か国調査」等）の中で、Buddhist “social work” という言葉が明示的に用いられた（命名）。それと前後して、実践に基づく研究（PBR）や、BSW の ABC モデルの提起等とともに、「専門職ソーシャルワークと仏教『ソーシャルワーク』の異同」の議論、BSW の作業定義の検討等（秋元, 2018）が行われた（「分類」）。言語化されていない事象や実践が現実感をもって馴致される過程（「物象化」）は現在進行中である。各国の僧侶や尼僧をはじめとする実践者や研究者らが、BSW という言葉や説明枠組みを用いて、国際フォーラムやウェビナーで協議したり、執筆・記述化したりする中で、それぞれの現場や歴史にある事象を言語化してきた。しかし、すべてが必ずしも同質の議論とは限らず、SRT でいうところの「認知的多相性」と同様に、それぞれの実践家や研究者によって語られる内容や表現には差異、あるいは多様性もみられた。ARIISW としては、現在も、BSW の実践や教育、理論の深化に向けて、各国の関係者と取り組みを進めている。

5. 考察

本研究では、アジア圏を中心とした国々における社会的表象としての BSW の浸透の過程の探索を試みた。SRT の視点は一つの切り口に過ぎないが、それを用いることで、社会的現実としての BSW の生成過程に光を当てることができた。本研究の知見は、(国際) ソーシャルワークに対しても様々な示唆を与える。とくに、主流言説ともいえる社会的表象としての西洋生まれソーシャルワークとは異なる位置づけから、BSW 研究は国境を越えて新たな言説生成の実践を提起してきたと考える。インディジナス・ソーシャルワークや脱植民地主義等の議論とともに、その意味を問うていくことは重要である。国境、宗教、文化の枠組みを超え、また西洋生まれの専門職ソーシャルワークや BSW に限らない、すべてのソーシャルワークにかかわる関係者との対話が促進されることも期待したい。

謝辞：本報告は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の成果に基づく。BSW 研究者・実践家の皆様および戸塚法子・ARIISW 所長に御礼申し上げます。BSW 研究に多大な貢献をされた秋元樹・ARIISW 名誉所長と郷堀ヨゼフ・淑徳大教授に最大限の深謝を申し上げます。

文献：秋元樹（2018）「西洋専門職ソーシャルワークのグローバリゼーションと仏教ソーシャルワークの探求」郷堀ヨゼフ他編『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ』学文社；矢守克也（2001）「社会的表象としての活断層」『実験社会心理学研究』41(1), 1-15

注：本報告の見解は発表者の責任で発表するものであり、弊所としての見解を必ずしも示すものではありません。